

## — 書 評 —

## メジロの眼—行動・生態・進化のしくみ

著 橋川次郎

2004年 海游舎 2,400円+税

この本は枕辺で読めるものではない。本書は著者のメジロ研究の研究史であり、著者および著者が指導した学生達の多岐にわたる研究成果で占められている。それらの一つ一つを確実に理解しながら読んでいくには、個体群生態学や集団遺伝学などの基礎知識と少々の忍耐が必要である。しかし、多彩な内容にもかかわらず、説明がわかりやすく、読み進む過程でハイムネメジロの生態が次々と解き明かされていくので、興味は尽きない。

著者はオクスフォード留学を終えて、ニュージーランド・ダニディン市のオタゴ大学に行く。ここで、初めてハイムネメジロに出会い、厳しい冬を生き延びるメジロたちの激しい闘争に強い印象を受けた。メジロの闘争は彼に2つの示唆を与えた。一つは、闘争の中に儀式化された部分があり群れの秩序を生み出しているのではないかということ、もう一つは、厳しい環境を生き抜く個体、すなわち「適者」とはどのような個体であるかと言う事である。「適者は誰か?」これが、その後には始まるメジロの長期研究のテーマである。

著者はまず人工餌場や飼育舎での観察により、群れ内での順位が個体の生存に影響を与える事を見だし、順位を決定する遺伝的形質があるとの予測を持つに至る。しかし、野外個体群で順位制がどのように機能しているか、どのような形質が選択されるのかといった疑問は、長期野外研究によらなければ解決できない。そこで、1964年にクイーンズランド大学に職を得たのを機会に、メジロの長期研究が始まる。その舞台はグレートバリアリーフにあるヘロン島である。このヘロン島にハイムネメジロ（著者は大陸の亜種と区別して「キャブリコンメジロ」と呼んでいる）が生息する。この長期研究の開始により、研究は個人研究から組織的な研究のレベルに拡大する。

研究は個体識別のための標識付けと、各個体の繁殖成功を明らかにする事に始まる。著者の標識方法は10個の数字にそれぞれ色を当てはめるというユニークなものである。これにより、2,000個体が識別できる。それも一瞬に!（私にはできなかつ

たが)。標識付けにより、400羽近いほぼすべての個体が識別でき、各個体の年齢、性別、出自、さらには、多くの個体で社会的順位が明らかになった。このような基礎の上にさまざまなテーマの研究が展開される。厳格な一夫一妻の維持機構、年齢や順位と生活史との関係、ボーカルコミュニケーション、個体群動態、島への分散と遺伝的分化、島の鳥類の特殊化、個体群存続可能性の評価などテーマは多彩である。それにつれて、どのように自然選択が働いているかという中心課題が解明されていく。読者は、次々に出てくる疑問を基に研究テーマが生み出され、それが解決されていく過程を楽しんでいただきたい。

島の鳥類の長期研究としては、グラント夫妻によるガラパゴスフィンチ類の研究をはじめ多くの例がある。ヘロン島での研究は40年の長きにわたり、多くの論文が生み出され、この分野の代表と言ってもいいだろう。『メジロの眼』というタイトルには、『フィンチの嘴』への意識がうかがえる。もっとも、「眼」そのものも重要な意味を持つ事は本書の中で述べられている。

私事にわたるが、私も1985/86年、1990/91年の繁殖期にこのメジロの研究に参加させていただいた。期間は短かったが、この体験は私の研究者人生に大きな影響を与えた。当時は、このような長期研究を可能とする大学の合理的なシステムなど整備された研究環境をうらやんだものである。確かに、日本の大学の研究支援体制は融通が利かず貧弱であり、最近では国立大学の野外生物研究施設の廃棄縮小が長期野外研究の困難さに拍車をかけている。しかし、40年におよぶメジロ研究プロジェクトの継続は、プロジェクトリーダーの著者や彼を支援する研究グループの並はずれた努力無しには不可能だった。衣笠祥雄やカール・リブケンの偉大な連続試合出場記録にも似て、評価される研究成果を生み続けたからこそプロジェクトの継続が可能だったのである。

長期研究は次々と新たな研究を生み出す。本書は鳥類研究を目指す人、大学院などで研究の訓練を始めた人などに鳥類個体群の長期研究の面白さを伝えてくれる。さらには、学生を指導する立場にある人々に、長期研究を企画遂行するためのマネジメントの大切さを教え、勇気を与えてくれる。

江口和洋

(九州大学大学院理学研究院生物科学部門)